

文学ドキュメンタリー①

老舎はなぜ、自らの命を絶ったのか

胡絮青の章

妻の立場

胡絮青はどのような人だったのだろうか。趙清閣について語る人は多くいて数々の資料が残されているが、胡絮青については本人が語っていること以外には資料がない。卒業してすぐに家庭に入ったので当然だといえは当然だが、後に交際する人も少なかったのかもしれない。

事実だけを書くとすると、「彼女は1905年12月23日に北京に生まれた。父親は早くに亡くなったが母親が遺産を何とかやりくりして子供たちを育て上げた。彼女は老舎と同様、自ら学費の要らない北京師範学校に入学した。1930年の春ごろ、まだ師範学校在学中に、老舎の友人が彼女の兄と知り合いだったことから彼の仲立ちで老舎と知り合い、結婚に至った。」

結婚した時彼女は27歳、老舎は32歳だった。当時としては晩婚だと言える。母親は何か早く嫁がせたいと思っていたことだろう。なぜこれほど結婚が遅かったのか。彼女のお眼鏡にかなう相手がなかなか見つからなかったのかもしれない。老舎は当時すでに長編小説を三編出版していて文学界では有名人であった。それにイギリス帰りでもある。自分の結婚相手に不足はないと思ったのだろう。



卒業時の胡絮青

彼女がどういう人だったかを示している証言がある。1978年6月3日、老舎が自殺してから12年後に名誉回復がなされ、剥奪されていた**人民芸術家**の称号も復活した。中国共産党と政府によって盛大な追悼式が行われ名士たちが参列した。その直後の6月12日に中国を訪れた有吉佐和子(1)は、16日の朝、胡絮青と長女に会った。有吉佐和子は1965年に半年ほど北京に滞在し、老舎の家を訪れていて胡絮青とも面識があったのだ。

このときの会話で胡絮青は、「夫は自殺したのではない」と主張し、会話の最後をこうしめくくった。

もう過ぎたことです。悲しいことは忘れませんでした。去年は華国鋒主席が、老舎の十年忌を盛大に営んで下さいましたし、老舎の遺骨は八宝山の第一号室に安置されるという光栄に浴しました。私は、その名誉を喜んでおります。自殺だという人がいても、私はかまいません。私の知る限り、老舎は自殺したのではないのですから。（『有吉佐和子の中国レポート』新潮出版, 1979.）

日本における老舎研究の草分け的な存在である老舎研究会の『会報16号』の「故胡絮青女史を偲ぶ会に出席する」にはつぎのように書かれている。

（中山）先生〔お茶の水女子大学名誉教授〕と（胡絮青）女史との2度目の出会いは、1981年初秋、『老舎小説全集』が翻訳出版され、それを記念して、学習研究社が舒乙氏と胡絮青女史を日本に招待したときだった。学研の歓迎会には、開高健、水上勉、城山三郎氏など、時の錚錚たる作家が招待されたとか、宴会半ばで、開高健氏かどなかかが、「私は以前に『駱駝祥子』の主人公祥子が最後に性病で、陰茎の先がぐちゃぐちゃに潰れて、形を成さなくなった様子が如実に加かっている版本があると聞いたが、私は未だにそれを見たことがない、その版本の存在は事実なのか」と尋ねると、女史は「老舎はそんな不潔なものは絶対に書きません」と毅然として、突っぱねられたとか。宴席はしばし白けたそうであった。

3度目の出会いは、1986年北京の対外友好協会ホールで行なわれた老舎の座談会の席でのこと、今は亡き北浦藤郎先生が「祥子の洋車〔人力車〕を引く描写は、いかにもそれらしく、実際洋車を引いた者にしか書けないと思える巧みさである、老舎は洋車を引いた経験があったのではないかと質問されると、胡絮青女史は凛として、「老舎はそんな卑しいことは、絶対にしていません」と強行に否定されたこと。これら二つの質問への女史の回答は、女史が作家としての老舎と、夫としての老舎に対する高い誇りを抱えていればこそその確信ある回答であるといえるのかもしれない。しかし私には、女史が老舎を貶めまい、老舎という大作家の清廉さと高潔さを殊更に印象づけようとする頑なさが感じられるのである。老舎といえば「ユーモア」といわれる、その夫人ならばこそ、「引いていたらもっと上手く書けたでしょうに」と茶目っ気のある対応をして、質問者、臨席者を喜ばせてくれる鷹揚さがあってもよいのではないかと思う。

追思会終了後、ホテルの先生のお部屋で伺った話である、先生は「私は不思議に思っているのだけど、胡絮青女史が声を上げて笑ったのを見たことがないし、彼女の笑顔も一度も見たことがないの、いつもきつと口の両端を結んで、厳しい顔をしていらっしやる姿しか思い出せないの」と。

胡絮青は人力車を引く仕事を卑しいと公の場で言っているが、実は老舎の十歳年上の兄は小さいときから家計を助けるためにいろいろな仕事をしていて、その中には行商や人力車引き、雑役の仕事も含まれている。老舎が書いた散文「家への手紙」には「誠実な人力車引きや工場労働者は絶対に汚職役人よりは優れています。そうは思いませんか？」と書かれている。老舎夫婦には人生における大きな価値観の違いがあったことがわかる。

この章の最初の部分で事実だけを書くとすると、に下線を引いたが、これにはわけがある。中国版のネット百科事典「百度百科」の胡絮青のところに次のような記述がある。これは当然胡絮青が話したことをもとにしたものだろう。

結婚してから二日目に、老舎が胡絮青に言った。「私にははっきりと言っておかなければならないことがある。ふだんもし私が黙って座ってたばこを吸っているのをみたら、くれぐれも私にかまわないでほしい。私は構想しているだけで、決してあなたのことを怒っているわけではない。私を煩わせないでほしいのだ。」

彼はさらに言った。「私たちは仲睦まじくあらねばならない。決していさかいをおこしてはならない。」

この話は老舎夫婦が守るべき信条となり、彼らは 35 年間一緒に住んでいたあいだ、けんかをしたことがなかった。

35年間けんかをしたことがなかった、というのは老舎の散文「子供を持ったあと」の内容から考えると事実ではない。また、ふつうに考えても35年間一度もけんかをしなない夫婦がいるとは考えにくい。この一文を読んだとき胡絮青が語ったことを無条件に信じてはいけないのではないか、という疑念が少し湧き起ってきた。

この疑念がさらに膨らんだのは胡絮青が73歳のときに出した画集の自序を読んだときだった。

私は文学を学び、教師をしていた者です。しかし幼少のころより絵画や文芸が好きで40歳になって師を得て途中からこの道に入った、いわゆる途中入会者です。……私にはすばらしい家庭があり、ずっと文を書くことをなりわいとしている夫がいました。夫は自分の絵の水準は幼稚園児に及ばないものの天性の鑑賞眼を持ち理論的な批評をし、画家との交友を好み、家にはいつも画家が多く集まっていました。壁には取り換え引き換え良い絵が掛けられ輝きを放っていました……。

見栄を張り多少の脚色や誇張をすることはだれにでもある。だが胡絮青のこの文からは、自分たちが幸せな家庭を築いていた、ということの特に関心づけようとしている意図が読み取れる。

老舎の自殺に関する証言でも、いろいろな点で矛盾が見られる。中央美術学院の元教授、常任俠(2)は、「老舎の死が知らされたあと、胡絮青が自分の家に飛んできて、老舎が自殺したことを告げた」と語った。

中央美術学院の常任俠は記憶を思い起こしてこのような話をした。

老舎の死を知った後、胡絮青が大通りを歩いて彼の家に来て、玄関に入ってくるや叫んだ。「常さん、老舎が自殺しました！」彼女は後悔の念をにじませて私に打ち明けた。あの日、老舎は暴行を受けて家に帰ってきて、夕食を食べようとした。彼女はいい顔をしなかった。それどころか、「これは始まったばかりで、いつまで続くかわからない。あなたのような反動作家はきりがなく叩かれて、舒乙たちみんなが影響を受けるのよ。ごはんが食べたいのなら、私は疲れているから自分で温めてください。」と文句を言った。彼女は言い終わるとひざまずいて「どうかほかの人には言わないでください。」と懇願した。

しかし常任俠はほかの人に言った。「私が言わないなんてことはとうていできない。」と、彼は親しい者に会うとそのことを話し、政治協商会議(全国統一戦線組織)でも話した。(原文A)

胡絮青は後に自分の証言に矛盾があると指摘されることになる発言をどうしてしたのだろう。自分がまったく想像もしていなかった事態が起こりパニックに陥り、あまりのショックでつい、最も信頼している人物に打ち明けて心を軽くしたかったのだろうか。

老舎の長男舒乙氏が自著『文豪老舎の生涯(中央公論社、1995)』に書いている。

母は知らせを受けて父を迎えに行った。一人乗りの人力車に、ふたりはしっかりと抱き合って乗り、明け方やつと我が家についた。

帰り際に、明朝必ず「反革命現行犯」のプレートを持って(市文連へ)出頭せよと厳命されていた。

次の日、父は家を出たが市文連には姿を見せず、行方知れずとなった。

明け方に連れ帰った日、母は父の手当てをしながら長いこと語りあった。それがふたりの最後の語りとなってしまった。……シャツを脱いだ父の余りにもむごたらしい有様を見て、母はあやうく泣き出すところだった。しかし泣いてはいけない。母は泣かず、手をとめず、懸命に話しつづけた。凝血して肌にこびりついたランニングシャツは脱がせようがなく、お湯に脱脂綿を浸し潤し、少しずつはがしていった。シャツの繊維は深く肉に食いこんでいた。手がいうことをきかず、手元が狂った。胸が顫え手も顫えた。体じゅうが顫えていた。ああ、何とむごい……、こらえていた涙がど

っと溢れでた。父は母に言った。「人民は私を理解してくれている、中国共産党と毛主席もそうだ！ 周総理は誰よりも分かってくれている！」

胡絮青は一九七九年、王行之(北京文連時代の老舎の後輩)に語っている。

夜中の二時、彼を連れて家に帰った。頭は傷がざっくり口を開けていて、顔中血だらけで、体中あらゆるところに青や赤の痣ができ、無傷のところは無いようだった。あの夜、家に帰ってもあまり話しをせず、眼にはかかって見たことがないような、憤怒と苦痛の色がありありとしていた。彼は私がとても辛そうなのを見て、反対に私を慰めて言った。「君は怖がることはない。苦しむ必要はない。毛主席が私のことを理解してくれている。」(原文 B)

人の記憶に食い違いが起こることはしばしばあるが「長いこと語り合った」と「あまり話をせず」とはかなりの食い違いである。

『老舎学会会報 15 号』に、「老舎之死採訪実録(老舎の死、インタビュー実録)を読んで」、という記事がある。

胡絮青と舒乙はそれぞれ老舎の自殺前後の状況について語っているが、内容に大きな食い違いが見られる。たとえば胡絮青は 93 年インタビューでは、8 月 24 日夜 11 時に電話がありトロリーバスで太平湖へ向かったと証言し、94 年インタビューでは、25 日午後に電話がありバスで太平湖へ向かったと証言しているが、舒乙は 94 年インタビューで、25 日夜に母親が火葬場の車に乗って太平湖へ来て父親の遺体を引き取ったと証言している。またたとえば、93 年胡絮青インタビューでは、23 日深夜、老舎は自分の胸の内を口述し夫人に書き止めてもらい、24 日午前 3 時に舒乙がそれを周恩来に届けにいったと証言しているが、舒乙インタビューでは、24 日午後に父親の血痕がついている布を腰に巻いて国務院へいったと証言しているだけで、父親の口述文書については一切言及がない。

胡絮青の記憶が各所でこのような食い違いを見せるのは、そのときどきに彼女が話を創作したからではないかと考えられる。老舎を迎えにいった胡絮青が、一人乗りの人力車に老舎としっかりと抱き合っただけで乗って帰ってきたという話は感動的ではあるが、ほんとうだろうか。もしそれが事実なら、「胡絮青が前日に傷ついて帰ってきた老舎を責め、ごはんが食べたいなら自分で温めて食べるようにと言った」、と証言した常任俠教授が嘘をついているということになる。だが、彼がわざわざ話をでっちあげる必然性はない。

胡絮青は 1966 年 8 月には常任俠教授に「老舎が自殺した」と言い、1978 年には有吉佐和子に「自殺だという人がいても私がかまいません。私の知る限り老舎は自殺したのではないのですから。」と言っている。話がまったく逆になっている。

紅衛兵に血まみれになるほど殴打されたあとで、「人民は私を理解してくれている、中国共

産党と毛主席もそうだ！ 周総理は誰よりも分かってくれている！」「毛主席が私のことを理解してくれている。」と、老舎はほんとうに言ったのだろうか。

老舎の死について調査されたレポートはいまだに公開されていない。「公表したくない不都合な真実があるからではないのか」という疑いがどうしても湧き起ってくる。

裏切りの果て



大字報を見る人々



文革のとき大字報と呼ばれる壁新聞に「〇〇はこういう罪を犯した」ということを書き、その人物を糾弾するということが行われた。罪状が書かれたプラカードを首から掛けられ、頭に紙で作った帽子をかぶらされることもあった。対象となった人物はみんなの前で「私は〇〇の罪を犯しました」と自己批判することを強いられた。

老舎についても、壁新聞にかつての趙清閣との「婚外情」のことが暴露された。そしてそれを書かせたのは妻の胡絮青で、暴露するようにと勧めたのは長男だったと言われている。なぜ夫や父を紅衛兵に売するような裏切り行為をしたのか。

趙清閣と老舎のことはすでに広く知られている事実になっていたのも、もし家族がそれを黙っていたら、家族まで真実を隠していたとして糾弾される可能性があったからだ。当時は親が子を、子が親を、兄弟同士が、勤め先の同僚が、部下が、互いの秘密を暴露し合った。どこかに密告者がいるかもしれないと、みんなは疑心暗鬼になっていた。

老舎は殴打されているとき、罵声の中に趙清閣の名前を聞いた。その名前を耳にしたとき、老舎は驚き怖れ、不安を感じたに違いない。壁新聞に趙清閣のことを暴露したのが妻であることを、おそらく彼は知っていただろう。

老舎が亡くなったあと、老舎の家族も紅衛兵たちの激しい攻撃にさらされた。人民芸術家として老舎が特権を享受していたと誤解されたからだ。だが文革の嵐が過ぎ去り老舎の名誉回復がなされると、胡絮青は画家として華々しいキャリアを積んでいった。「老舎夫人」の肩書は彼女を一流の画家に押し上げてくれた。彼女の経歴には必ず「老舎夫人」の四文字が書かれている。香港でもアメリカでも展覧会を開くことができた。ベトナムの元主席ホーチミ

ンには彼女の絵が国からの贈り物として渡された。

文革のときに老舎と趙清閣のことを彼女が暴露したのは、そうしなければ自分がつるし上げられたかもしれないからだ。でも、正直なところ、彼女には少しは復讐をしたい気持ちもあったのかもしれない。彼女だけにすべてを押し付けて老舎は二度も家族を捨てて遠いところに行ってしまったのだ。四人の子供を一人で育てるのがどれだけ大変だったことか。

そして名士となり、周恩来から直々の帰国要請の手紙をもらい帰ってきてからすぐに「離婚してくれ」と言われても、「はい、わかりました」と言えるはずはない。だれが考えても理不尽な話だ。

……私にはすばらしい家庭があり、ずっと文を書くことをなりわいとしている夫がいました。……私は八十歳まであと七年という年になり、知らず知らずのうちに数百枚の絵、数百の賛詞が貯まりました。これは私がこの世に生まれて無駄ではなかったことを証明する足跡のようなものです。

私は 80 枚を選びここに印刷しました。遠くをながめれば、確かにまばらでゆがんだ足跡が続いてはいますが、それらは一つの確実な証拠を与えてくれるものです。歩き回り、登り、探し求めたのはすべて美を持ってこの世界に貢献するためでした。(画集の自序 百度百科より)

彼女は最後まで離婚に応じなかったことで自分が望んでいた「名誉」を手に入れた。老舎から受けた苦痛の大きさを思えば、これらの名誉は彼女が受け取るにふさわしい報酬だ。彼女がたとえ自分の幸せな人生の物語を創作して語ったとしても、それが彼女の中での「真実」で彼女が幸せならば、他者がどうこう言う筋合いのものではない。

ただ、老舎の生涯についてこれまで研究されてきた中で、彼女の証言がもとになっているものも多い。これから幾分か書き直しが必要とされるだろう。

.....

(1) 有吉佐和子 (1931-1984) : 小説家。「恍惚の人」「複合汚染」「華岡青洲の妻」などの作品がある。
 (2) 常任侠 (1904-1996) : 芸術考古学家、東方芸術史研究家。音楽、舞踏史の研究でインドや日本との文芸交流に貢献した人物。

【原文掲載図書・URL】

A : 老舎的生前死後 http://www.open.com.hk/content.php?id=1937#.WkT3y99l_tQ

B : 『老舎寫作生涯』百花文芸出版社,天津,1981.